＊＊＊＊＊＊あなたの町の情報誌＊＊＊＊＊＊

# 住まいル新聞

大月人物伝　甲州街道笹子宿の今昔

日本ステンレス工業株式会社
発行/日本ステンレス工業株式会社
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1
電話=0554-22-2500
FAX=0554-22-5234
Vol.136 2011 1月号

## 新年明けましておめでとうございます。

住まいル新聞　編集責任者
日本ステンレス工業株式会社　代表取締役会長　石岡博実

住まいル新聞をいつもご愛読頂き心より感謝申し上げます。

住まいル新聞も、御愛読者様、執筆頂きました諸先生方のご尽力を頂きまして、発刊から、早や十年になりました。「大月市民に大月市の事をもっと知って頂こう」との思いから、先ずは石井深先生（故人）に執筆いただき大月にまつわる民話「ぐるり散策」と称し、広告及びタウン情報誌として平成十二年（二〇〇〇）スタートいたしました。以来、北條明直先生（故人）に歴史探訪「岩殿山を知ろう」の執筆依頼。その後長年にわたり現在の「大月人物伝」編集委員会委員長の山口善久先生へと引き継がれて参りました。何気ない「大月の事をもっと知って頂こう」との思いは、一冊の本にしたため「心に舞う」シリーズとして後世に残す決心をいたしました。当時、経済は低迷へと向かっていましたが、決心した思いを切らすことなく、全社員一丸となって現在まで出版業務への戦いに立ち向って参りました。一冊、一冊の出版を試みた結果、現在では大月市における貴重な資料として、重要な文献へと発展したのでは…と自負するところで御座います。小生五十八歳、今まさに十年間の時を経て感慨に更ける昨今であります。これも偏に、現在まで執筆の労をとって頂きました、山口善久先生はじめ井上豊先生他十一名の各先生方のご尽力のお陰と厚く御礼申し上げる次第です。

現在、第六巻目「続大月人物伝」（仮称）の執筆作業を続けております。執筆中の先生方は七十～八十歳の先生方です。さもすれば消え去ろうとする記憶をたどって、遠く足を運び、編集の作業に精力的に取り組んでおられます。今後多少の記憶違いも起ることもあろうとは存じますが、諸先生方のご高齢、ご多忙に免じお許し頂きたく執筆者に代わりお願い申し上げる次第です。

今後とも、ご愛読の皆様方には更なるご協力、ご鞭撻のほどお願い申し上げ新年のご挨拶といたします。

〈第六巻「大月人物伝」編集メンバー〉

【編集委員長】
山口善久

【編集委員】
天野平八郎
井上文次郎
井上　豊
小林脩一
仁科義民
西室泰照
平井　茂
星野喜忠
山口英昭
杉本正文
小俣早苗（敬称略）

※「心に舞う」シリーズは、「世界平和太鼓」の両面に書かれている「心」「舞」に由来するものです。

## 大月人物伝 歴史探訪

# 甲州街道笹子宿の今昔

追分人形のメンバー達

**【笹子の地名の由来】**

笹子の地名は、鶯の子供（泣き方を笹鳴きと言う）からつけたとの説がある。「笹子鳴く　駕籠の前より　後より」との句が、昔から言い伝えられている。元々は、笹子の地名は、クマ笹が多い事から付けたとの説もある。

**【笹子峠と追分人形】**

笹子の追分は国道から少し離れているから気付かないが、ここで笹子川沿いに右に進む甲州街道と、左の大洞沢を上る鎌倉往還に至る山道に分かれていた。昔の人は歩くのは当たり前、明治三十六年（一九〇三）、中央線が甲府まで開通すると、今の御坂町の人々は藤野木から習木峠を越え大洞沢を下り歩いて笹子駅に出たと聞いている。さていよいよ峠に上り最後の集落、この追分の天野家に、すばらしい百二十体の頭と豪華な刺繍入りの衣装、貴重な台本の数々

大月人物伝 歴史探訪

# 甲州街道笹子宿の今昔

が残されている。しかも二百数十年の時を経て、今なお天野家を中心に集落の人々によって演じ続けられている。

追分人形芝居は、江戸時代、阿波国から伝えられた三人遣いの浄瑠璃人形、義太夫節の伴奏に合わせて演じられる本格的な芸能である。はるばる西国からたどり着いた阿波人形の一座が当地に伝えた。今の座長の天野新一から十八代、新生人形座として五代遡る天野利衛義兼に始まるという。十郎兵衛、喜八、勝頼、時姫など、頭はいずれも、由良亀や天狗久らの本場の名工の作で、また村中が焼けた火災からも明治末の大水害からも守られてきた。そのすばらしさには目をみはるばかりである。

いずれも繰り返し補修され現在まで使われ続けてきた。レパートリーは、「奥州安達原」「本朝廿四季」「生写朝顔日記」「絵本大功記」などおなじみの演題から、地元の悲恋話を脚色した「吉久保美人鏡」「小松怨霊」まで数十に及ぶ。

追分、新田地区は峠の入り口、昔はわずかの田畑と養蚕、山仕事が主な生業であった。豊かになり始めた近隣の農山村の人々の求めに応じて、西川一座を組み各地を講演して歩いたものだという。江戸末期の最盛期には、遠く信州や越後、相模や駿河また江戸にも巡業に出て好評を博したというから想像もつかない活躍であった。先代が若い頃には甲府でも公演、地元の芝居にも出演して喜ばれたそうだ。昭和三十五年（一九六〇）、県の無形文化財に指定され、今ではホールや特設ステージでの公演がほとんどだが、農家の縁先や祭りの神社の境内で、気軽に演じられることもあった。また今伝統の復活に大きな声援が送られ、最近は笹子追分人形保存会会長天野茂、仁、ほかのメンバー一同によってその芸は着実に次の世代に受け継がれようとしている。

**【矢立の杉と身代り両面地蔵菩薩】**

大月市では最近、歌手「杉良太郎」の新曲「矢立の杉」の発売を機に、「矢立のスギ」のある大月市を全国にPRする絶好のチャンスととらえ、周辺地区の整備に取り組むとともに、歌碑を建立した。

歌碑の除幕式

「矢立のスギ」は、杉自身初のプロデュースとなる大阪・新歌舞伎座公演「闇の身代り地蔵」にも登場するわけで「舞台の中に出てくる地蔵を置きたかった」と、杉は身代り両面地蔵菩薩を大月市に寄贈してくれた。「矢立のスギ」の前で歌碑と地蔵の除幕式には、妻で歌手の伍代夏子、舞台に共演する山本譲二、山川豊等も同席した。

また、そのあと大月市総合福祉センターに場所を移して、舞台「闇の身代り地蔵」の製作発表を開催した。

**【笹子餅の由来】**

現社長喜宗の祖父・天野丈平は、中央線開通前甲州街道笹子宿において、料理旅館及び笹子峠の峠馬車（曽祖父の考案による人・荷運搬用）を営業していたが、明治三十年より中央線笹子隧道の開墾が開始されるや、衆議院議員である従兄・天野薫平（山梨酒造株式会社←笹一酒造）に協力して用地の買収、村当局との折衝、或は施工に関する業務の援助、鉄道関係諸官の住居、宿舎の斡旋等に奔走し、更に明治三十六年（一九〇三）二月に笹子隧道開通後も諸般の整理に尽力して笹子宿の発展に大いに貢献した人である。当時、笹子隧道は東洋一の長いトンネル（全長四六五六m）として、通過するのに、十数分を要し、煤煙と、長時間を要する旅客サービスを要請されていた。

一方、笹子駅は笹子隧道の東側に設置されたもので、鉄道開通前はこの峠に甘酒茶屋（『矢立の杉』の直ぐ傍に跡地あり）が有り、「峠の力餅」と旅人に愛好されていたが、開通とともに、衰微して遂に閉店の止む無きに至りこれを「笹子餅」と名称を変え、当局の承認を得て駅構内立買営業を始めた。こうして明治三十八年六月二十八日、帝国鉄道庁運輸部長の承認をえた。

更に、丈平は、東京日本橋の栄太郎本舗より職人を招き、特に品質の吟味と独特の風味により優秀品を調整し益々「笹子餅」「笹子饅頭」の品質を向上して販売したので永い間、旅客の好評を博し、中央線唯一の名物として爾来、現在まで百有余年、利用者に愛顧されてきた。

大正二年、当時の鉄道大臣元田肇より「名物に　甘いものあり　笹子餅　国東」との、賞辞をはじめ、今日多くの人々の賞詞、賞句がある。

大月名物「笹子餅」

「旅慣れぬ　母の記憶に　笹子餅　八重夫」「古里の　行きに帰りに　笹子餅　明雄」。また最近では、現当主は先年亡くなった、金田一春彦に大変かわいがってもらい、「笹子馬子唄」（西岡文郎作曲、原田直之唄）まで作ってもらった。「桃の咲く　峠の茶屋で　食べた草餅ゃ　忘られぬ　春彦」

「笹子餅」の歴史は、江戸時代を遥かに遡るが、公式文献では、上記の日を創業にしている。餅だけの単品営業で、百年以上続いているのは、全国的にも稀であるという。従って、創業者を初代・天野丈平とし、二代目・天野文平、三代目・天野喜治、そして現社長の四代目・天野喜宗と続いている。

参考資料
「時をつなぐ街」大月市制五十周年記念誌

資料提供者　天野喜宗
執筆者　星野　喜忠
協力者　山口　善久